

発達段階

Q1 児童生徒の不適應行動を発達段階からとらえると、どのような見方ができますか？

心理的な要因から起こる児童生徒の問題行動や症状のとらえ方の視点の一つとして、発達段階からとらえることができます。

つまり、成長発達に必要な精神的・情緒的エネルギーを必要な時期に、親（あるいは親の代理）から十分に与えられなかったり、発達の過程で乗り越えるべき課題を乗り越えられなかったために現在の障害に対処しきれなくなっているという考え方です。そのために、無意識のうちに大人へのSOSの信号として、問題行動や症状を呈しているにとらえます。

これは児童生徒を理解していく上で、大切な視点の一つです。

発達理論には様々ありますが、ここでは、小学校入学前、小学生、中学生、高校生の時期に分けて紹介します。

乳児期（0歳～1歳頃）

この時期には、母子相互作用など親との1対1のふれあいにより、人間形成の基礎となる基本的な信頼関係を形成します。例えば、母親は授乳やおむつの取り替えや抱っこやあやしなどを通して、乳児に情緒的に優しく応答します。乳児が必要とするときに必要な欲求を満たしてあげる体験を重ねていくことで、乳児は満足感や安心感だけでなく、他者への信頼感を身につけていきます。それが将来の対人関係の原型にもなってくると考えられています。

幼児期（1歳～6歳頃）

この時期になると、親との愛着関係を通して、少しずつ親と離れられるようになり、活動範囲も家族だけの世界から外界へと広がります。

3歳頃になると、自分の性別を意識するなど、自己と他者を区別し比較するようになり、自分の主張や要求を頑固に通そうとします。また、親が指示したことに対して強い抵抗を示すようにもなります（第一次反抗期）。5～6歳頃には、自分の達成したことと他者が達成したことを比較することで競争心が芽生えるようになります。

このようなプロセスを経て、この時期の子供は「一人遊び」よりも「集団遊び」を志向するようになります。このように、幼児期において経験される集団生活は、子供の社会性の発達に重要な影響を与えます。

この時期は、子供が親・家庭から分離していく練習期と言えます。

小学生の時期

この時期になると、知能、社会性、自立性が著しく発達してきます。また、活発に活動し、遊びの世界をつくり上げます。この時期の仲間集団をギャング集団ともいい、この集団の中では、自分と他者が同じ遊び仲間であるという心理的な意識を共有します。この意識の共有によって、青年期に始まる1対1の親友関係が構成される基礎となってきます。さらにこの時期は、少なくとも遊びの面においては大人から自立する重要な段階とも言えます。

自立性が徐々に発達するため、大人からの干渉に対して「大人にもできないようなことを、なぜ言うのか」といったような自己主張も出てきます。こうした主張の表れは、自我意識が正常に発達していることの証でもあります。

児童期には、泥んこになって遊んだり、スポーツに熱中したり、動物の飼育や昆虫採集に熱中したりするなどの一見すると学業に直結しない経験が、子供の心の成長にはとても大切になってきます。

中学生の時期

この時期は第二性徴が始まって、男性的、女性的な体つきが目立ち始めます。この変化が心に動揺を与え、不安を引き起こすことがあります。また、友人関係が小学生の時期以上に重要になってきて、一層親密度を増し、自己を形成していく上でとても重要なものとなります。一方、親とは距離を置いて、秘密を持ち始め、それまで依存してきた親から心理的に独立しようとし（心理的離乳）。周囲の大人や権威に対しても、拒否的・反抗的態度を示すようになります（第二次反抗期）。

また、自己愛が高まる時期でもあるので、何でもできるような万能感に陥ったり、逆に自己を卑下したりして、現実検討力が低下することがあります。

高校生の時期

この時期を、ルソーは「第2の誕生」、ゲーテは「疾風怒濤しっふうどとうの時代」と呼びました。急速に身体と心が発達し、不安や動揺が激しくなる時期だからです。しかし、それは自立した大人になるための大切な準備期間ともいえます。また、友人関係においては、共通の悩みや個人の悩みを共感し合い、精神的な結びつきを基準として友人を選ぶようになります。生活の大部分が友人との交流を中心として進んでいきます。その反面、物思いに耽ったり、日記や詩を書いたりするなど、自己の内的世界にも目が向くようになります。

このように、集団と個の間を揺れながら、自分自身について問いを発し、自己を確立しようとしていきます。